暁烏文庫『大東輿地図索引』に挟み込まれていた暁烏敏宛の葉書について

著者	村上 慧馬, 古畑 徹
著者別表示	MURAKAMI Keima, FURUHATA Toru
雑誌名	金沢大学資料館紀要
号	17
ページ	25-36
発行年	2022-03
URL	http://doi.org/10.24517/00065775

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

暁烏文庫『大東輿地図索引』に挟み込まれていた暁烏敏宛の葉書について

On the Postcard Addressed to AKEGARASU Haya (暁烏敏) which was Inserted in "*Daitoyochizu Sakuin* (大東輿地図索引)" in AKEGARASU BUNKO (暁烏文庫)

村上慧馬(1)・古畑徹(2)

Keima MURAKAMI, Toru FURUHATA

(1) 金沢大学大学院人間社会環境研究科

Master's Course, Human and Socio-Environmental Studies, Kanazawa University

(2) 金沢大学　人間社会研究域　歴史言語文化学系

Faculty of Letters, Institute of Human and Social Sciences, Kanazawa University

Abstract

This paper examines the origin of a postcard addressed to AKEGARASU Haya (暁烏敏), which was inserted in the "*Daitoyochizu Sakuin* (大東輿地図索引)" in AKEGARAU BUNKO (暁烏文庫：Collection of books by AKEGARASU HAYA), and the information obtained from it. As a result of the investigation, it was found that this postcard was sent to AKEGARASU Haya on November 29, 1936, from OTANI Shoshin (大谷勝眞), a professor of law and literature at Keijo (京城) Imperial University and a priest of Shinshu sect Otani school. The main purpose of the postcard was for OTANI to inform AEGARASU that the distribution of "*Chosenshi* (朝鮮史：History of Korea)" by the Society for the Editing of Korean History, as requested by AKEGARASU when he visited Keijo, had been realized. By investigating the background of this postcard, we can obtain information about the Oriental historian OTANI Shoshin, information about the distribution of "*Chosenshi*", as well as information about AKEGARASU's friendships and his book-collecting process. In this sense, this postcard is a valuable resource that will contribute to these studies.

はじめに

2021年の初め、村上が金沢大学中央図書館暁烏文庫所蔵の『大東輿地図 奎章閣叢書第2』（京城帝国大学法文学部、1936年）の本編及び索引の二冊[1]を借用し、索引を使用していた際、そこに暁烏敏に宛てた葉書（以下、本葉書と呼ぶ）が挟みこまれていることを発見した。本葉書は、昭和10年代における暁烏敏の交友関係や学術界の状況に関する新たな情報を提供する新史料と思われたので、古畑のアドバイスを受けつつ、それらについての調査をした。本稿はその調査についての報告で、村上が原稿を作成し、古畑がそれを整理・増補・改稿したものである。

以下では、まず本葉書に関してその外形、記載事項、印影などについて簡単に説明し、次に差出人に関する情報を可能な限り明らかにしたうえで、本葉書が書かれた事情と背景について考察する。なお、以下では便宜上、本葉書の宛先の書かれた側を表面、本文の書かれた側を裏面とする。

1. 本葉書の概要

まず、本葉書の表面と裏面の写真を示し、その記載文面の釈文を示す。

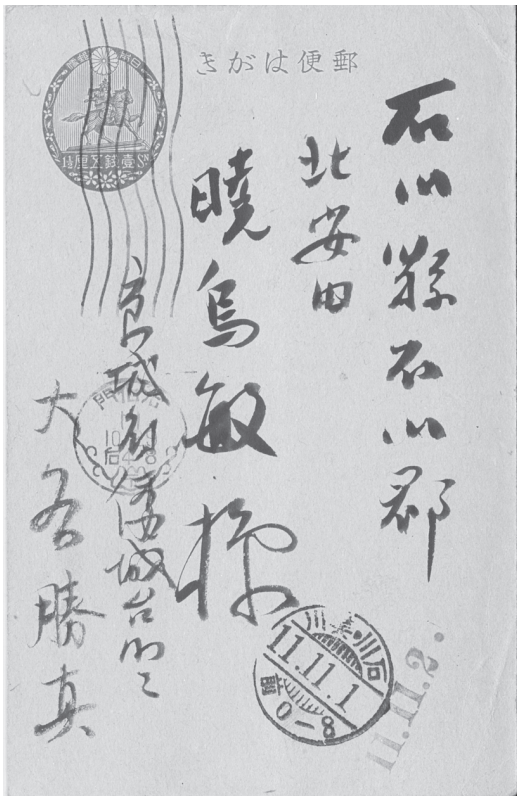

図1　暁烏敏宛葉書表面

表面釈文

1　石川縣石川郡
2　北安田
3　暁烏敏様
4　京城府倭城台四二（?）
5　大谷勝真

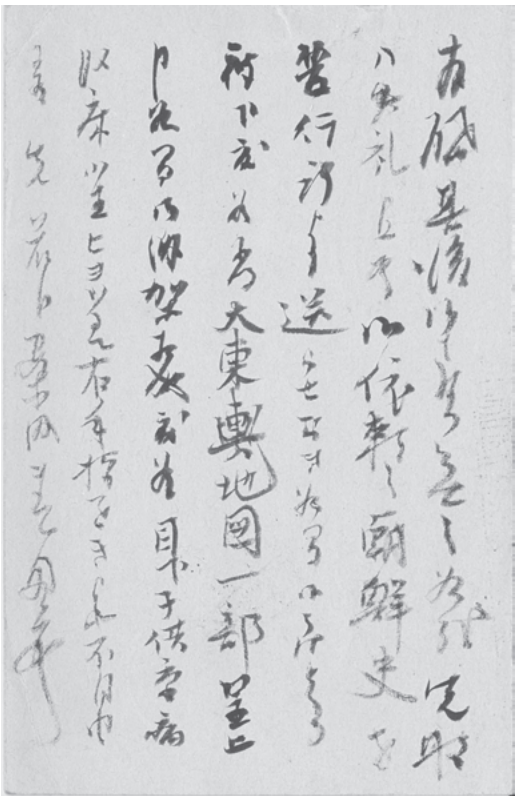

図２　暁烏敏宛葉書裏面

裏面釈文

1　拝啓其後御□□差し為□先般
2　ハ失礼有共御依頼之朝鮮史を
3　苦行□より送らせ□□為□□□□□□
4　□□度為尚大東輿地図一部呈上
5　申差間御添架相成私共目下子供方々病
6　ノ床ツきヒヨリ見右ノ事様をき□□不日申
7　□□先ツ右ゟ案内まて□□也敬具

本葉書は官製葉書で、縦148mm×横100mmである。表面は宛先住所２行、宛先氏名・差出人住所・差出人氏名各１行の合計５行、裏面は本文で全７行、各行13字から19字で記されている。

表面左上の料額印面は楕円形で、中央には皇居前の楠公（楠木正成）像が描かれ、料金は「一銭五厘」と記されている。このデザインは昭和５（1930）年に採用されて、昭和12年に２銭に値上がりするまで使われた。上部の「郵便はがき」の表記は昭和８年からのものなので[2]、それ以降に購入されたものである。速達・航空郵便等を示す印影などはない。

本葉書表面に押された印影には、郵便局の消印と暁烏敏の受領日付印の二種類がある。

消印は、料額印面上の櫛型ローラー印以外に２つあり、図３と図４である。

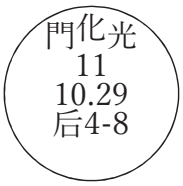

図３　光化門郵便局消印

図４　美川郵便局消印

当時の郵便消印（丸型和文印）は図5のような構成になっており、「郵便局名」はその郵便物を受け取った郵便局を示し、「年月日」は受領した日付で、「和暦.月.日」の順に算用数字で示した。「受取時間」は時間帯の形で示され、「前（午前）X－Y」もしくは「后（午後）X－Y」（X・Yは算用数字）の形式で表記されていた。このルールに従ってそれぞれの消印を読み解くと、図3の「光化門」は朝鮮京城府光化門郵便局で、昭和11年10月29日の午後4時～8時の時間帯にこの郵便物を受領したことを示す。図4の「石川・美川」は石川県美川郵便局で、昭和11年11月1日の午前0時～8時にこの郵便物を受領したことを示す。したがって、図3が差出局の消印、図4が配達局の消印である。

図5　郵便消印
（丸型和文印）

次に図6だが、青色のインクで「11.11.2·」とある。これは暁烏がこの時期に使用していた受領の日付印である。この印は「和暦.月.日」で構成されており、葉書を受け取った日に押印したものと考えられる。

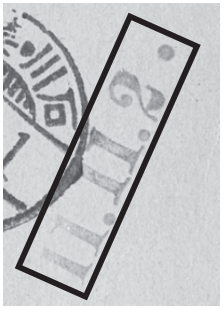
図6　受領日付印

これらの印影から得られる情報をまとめると、本葉書は昭和11年（1936）10月29日に朝鮮総督府京城府光化門郵便局の窓口もしくは管内の郵便ポストに差し出され、午後4時から8時の間に消印が押された。それが配達局である石川県の美川郵便局に到着したのが昭和11年11月1日の午前0時から8時の間、その後、暁烏の家に配達されて暁烏の家人が手にしたのが翌11月2日である。実はこの日、暁烏敏自身は家には不在で、九州を旅行中だった。帰宅したのは11月9日である[3]。したがって、本葉書に押印したのは家人であり、暁烏敏本人がこれを読んだのは11月9日以降ということになる。

次に、本葉書の記載事項だが、表面は先述のように宛先人の住所・氏名、差出人の住所・氏名である。このなかで注意されるのが、宛先人住所（図7）で、「石川県石川郡北安田」としか書かれていないことである。暁烏の住む妙達寺は石川郡出城村北安田にあり、宮沢賢治の父である宮沢政次郎から暁烏敏宛の書簡や葉書では「石川郡出城村北安田妙達寺」と書かれている[4]。出城村がないと、仕分けの時点で石川郡のどの局に送るべきかわからない可能性は高い。事実、当時の郵便区画によれば、出城村は松任郵便局管内となっており、美川郵便局ではない[5]。11月1日の早朝に配達局に着いたにもかかわらず、暁烏家に本葉書が届いたのが翌日になったのは、11月1日が日曜日で配達業務がなかったからと見られるが、本来の配達局ではないところに届いたという事情も関係しているかもしれない。

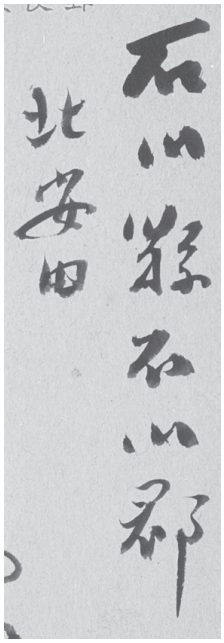

図7　宛先住所

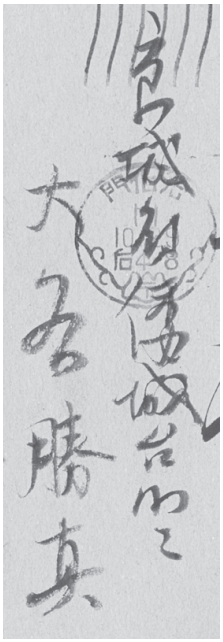

図8　差出人住所・氏名

一方、差出人の住所（図8）は、「京城府倭城台」までは間違いない。その後の文字が分かりにくいが、「四二」ではないかと思われる。差出人は「大谷勝真」とあるが、この人物については節を改めて論じたい。

2. 差出人大谷勝眞について

本葉書の差出人である「大谷勝真」は、昭和11年当時、京城帝国大学法文学部東洋史学第一講座の教授であった大谷勝眞のことである[6]。彼の生涯や業績を記したものは少なく[7]、ある程度詳細を記した論文としては西脇（2009）[8]がある程度である。ただ、これも大谷勝眞の在外研究を中心に記述したもので、それ以外に関してはあまり詳しくはない。そのため以下では、西脇（2009）の情報を中心に、『官報』や『朝鮮総督府官報』などの官公文書等も加えて、大谷勝眞がどのような人物であったかを明らかにした上で、暁烏敏と大谷勝眞との関係にも触れてみたい。

大谷勝眞は明治18（1885）年の生まれで、祖父は真宗大谷派21世大谷光勝（1817-1894）、父は東本願寺法務局執綱大谷勝尊（1858-1913）、母は中院通富伯爵の5女旭子（1866-1892）[9]である。長じて自らも仏僧となったが、彼の業績の多くは仏僧としてのものではなく、東洋史学者としてのものである。

彼の経歴を追うと、東京帝国大学文科大学史学科を明治41（1908）年に卒業し[10]、大正5（1916）年に学習院講師となり[11]、次いで大正9（1920）年4月1日付で学習院教授に補任されると共に、高等官六等に補せられた[12]。学習院教官時代には、学生を引率して朝鮮に視察旅行に行っている。

大正15（1926）年、京城帝国大学に本科が設置されると、法文学部教授に補せられ、官位を高等官三等に進めた[13]。翌昭和2（1927）年には在外研究員として欧州視察に向かい、この時にベルリンに滞在した折、ベルリンに保管されていたトルファン文書を閲覧・筆写した。この文書はその後の戦乱の中で散逸してしまったため、大谷によって筆写された内容は西域史研究において貴重な史料となっているという。西脇はこの留学について、「彼は京城帝国大学在任中の昭和2（1927）年3月17日からの2年間、東洋史研究のために在外研究員としてフランスとイギリスに留学した」[14]と述べている。しかし、『朝鮮総督府官報』によれば、実際の留学期間は1年6か月であり、その目的地には当初からドイツが含まれ、更にアメリカ合衆国も含まれていた[15]。このことから、恐らく当初よりドイツに向かい、ドイツ探検隊将来の西域古文書を閲覧する計画を有していたものと考えられる。また、彼にはこの洋行に際して年額2,275円が支給されていた[16]。

また、京城帝大で教鞭をとる傍ら、朝鮮総督府の修史事業にも参加し、昭和6（1931）年11月からは朝鮮史編修会委員として、『朝鮮史』の編纂にも携わっていた[17]。このことについては次節で再度触れる。

その後、昭和16（1941）年12月7日、丹毒のために56歳で死去した。生前の官位は従四位であり、朝鮮総督府より没時陞位が上奏され、正四位が追贈された[18]。西脇（2009）によれば、大谷は洋行の際に敦煌文書の内容を記録したノートを持っていた。このノートは大谷の死後、京城帝国大学法文学部の同僚で、当時東洋史学第二講座の教授であった鳥山喜一の手に渡った。鳥山は、その後終戦の混乱の中でこのノートを手放してしまい、それが古本屋に並んでいたものをソウル延世大学の閔泳珪が買い取り、龍谷大学の上山大峻が韓国仏教史籍視察団に参加した折、閔から入手したとされる。龍谷大学では現在に至るまでこのノートのコピーが保管されているという[19]。

なお、大谷勝眞の論著目録は存在していないようなので、調査をして本稿末に附表1として附した。

次に、大谷の住所について検討する。大谷の住所である倭城台は、京城府（朝鮮王朝時代は漢城。現在はソウル市）の南山北側にあった町名である。ここは京城における最初の日本人集住地帯である。それは、1884年の甲申事変で焼失した日本の公使館を再建する土地として、朝鮮政府が日本政府にこの地を提供したことに始まる。そして1885年に日本外務省は、日本人の漢城渡航と通商

を許可したが、かつて40数名の日本人居留民が殺害された経験から、治安維持を目的として公使館周辺の一定の範囲にその渡航者を居住させることにした。こうして日本人の集住地帯が南山北麓の倭城台に生まれ、そこから居留民の居住地が拡大していくこととなるのである[20]。こうした関係で、倭城台には日露戦争後に韓国統監府が置かれ、それは韓国併合後に朝鮮総督府となり、1926年に景福宮前に新総督府ができるまでこの地が日本の朝鮮支配の中枢であった。そのため倭城台には日本人官吏のための官舎があったとされる。大谷勝眞もそうした官舎の一つである倭城台官舎三号に居住していたことが、当時の紳士録から確認できる[21]。

なお、大谷勝眞は、昭和16年3月に母である故中院旭子の歌集である『玉蘭女史遺詠』を私家版として刊行したが、そのあとがきに「京城南山麓倭城臺僑居にて」と記している[22]。また、本書の奥付では、編集者兼発行者である大谷勝眞本人の住所を「大阪府中河内郡八尾町八尾別院」としている。したがって、大谷は真宗大谷派の僧侶として、八尾別院[23]の門主となっており、日本本土に戻った際にはここに住まいしていたものと思われる。

以上を踏まえて、大谷勝眞と暁烏敏との関係について検討する。両者とも真宗大谷派の高僧であったから、ここに接点があるであろうことは容易に想像がつく。幸いなことに暁烏敏は、若い時より日記をつけ、また自らが発行する月刊誌『願慧』[24]では日々の出来事を綴っていた。それらは『暁烏敏全集』[25]に収録されており、おかげで暁烏の日々の動静を詳細に知ることができる。そしてそうした記述のなかに、大谷勝眞が何度か登場する。特に注目されるのは、本葉書が出される直前の昭和11年10月3日から7日の間、暁烏敏は京城に滞在し、大谷勝眞と会っていることである。

この時のことを記した「京城行」[26]には、まず10月4日午後4時半に暁烏が「京城大学教授大谷勝眞師」を訪問し、『大般涅槃経疏』のコロタイプ版をいただいたことが記されている。大谷に「師」の敬称を使用しているところに、両者の付き合いが僧侶としてのそれであることが端的に示されている。続いて10月6日には、京城大学附属食堂での晩餐会に大谷が出席したことが記されている。記事はわずかにこれだけだが、これと本葉書には何らかの関係があるであろうことは容易に予測がつくであろう。

その後、昭和15年の朝鮮旅行でも、暁烏は5月12日午後3時に大谷を訪問している[27]。昭和11年以前の両者の関係を示す記事はまだ見つけ出せていないが、少なくとも昭和11年の暁烏の大谷訪問以降、両者が親しい関係にあったと見ることはできるであろう。

3. 本葉書本文の内容について

本節では、本葉書本文の記載内容について検討する。

本文を完全には釈読できなかったが、最初の行はあいさつ、最後の3行は家族の消息のようであるから、本葉書の本題は2行目から5行目にかけてであると思われる。まず注目されるのが、2行目の「御依頼之朝鮮史」である。前節でみたように、大谷勝眞は朝鮮史編修会委員として『朝鮮史』の編纂に携わっており、この「朝鮮史」はそれを指すものと思われる。現に暁烏文庫には、朝鮮史編修会編『朝鮮史』全37巻（目録・索引を含む）が揃っており、それらに押された暁烏の受領日付印を調べてみると、昭和11年3月末までに刊行されていたすべての『朝鮮史』に「11.11.11」、つまり昭和11年11月11日受領を示す印が押されていることが確認できる（巻末附表2）。この11月11日は、暁烏が九州から帰ってきて、不在中の書物の整理をした日であることが、彼の「おとりこし」という文章から確認できる[28]。つまり、暁烏は10月からの朝鮮・九州旅行で購入して送った書物や、この期間に送られてきた書物を、11月11日に整理して受領日付印を押したのであり、

その中に『朝鮮史』もあったということである。

次に検討したいのは、この『朝鮮史』を暁烏が大谷に「依頼」した、その時期と依頼内容である。その時期だが、「御依頼」の前に「先般ハ失礼有共（あれども）」と書かれていて、逆接で「御依頼之朝鮮史」とつながるのだから、依頼は「先般」にあったと見るべきである。とすれば、前節で確認した10月4日もしくは6日に京城で両者が会った際のことと考えてまず間違いない。では、何を依頼したのか。

一般的に、暁烏は書店に注文して本を購入することが多いが、個人の人脈を通して購入した事例や、他者の蔵書を寄贈の形で譲り受けた事例も少なくない。とすれば、これも大谷勝眞に代わって『朝鮮史』を購入してくれと依頼した、あるいは大谷の所持していた『朝鮮史』を譲ってくれと依頼した、ということであろうか。しかし、もし前者だとすれば代金の問題が発生するはずで、それについて何も書いていないのは腑に落ちないし、後者だとすればあまりに図々しい。ほかの考え方はできないであろうか。

『朝鮮史編修会事業概要』（朝鮮総督府朝鮮史編修会、1938）によると、『朝鮮史』刊行の目的は、博く世に流布させて従来の間違った観念を改めることなので、印刷会社に廉価で売らせるとともに、朝鮮史編修会から「圖書館・學校及び朝鮮史研究者等に限り」直接配布したという[29]。五月雨的に刊行され、既に26冊にもなっている既刊の『朝鮮史』全冊を書店に依頼して集めてもらうのはけっこう手間で時間もかかり、無理な場合もあり得るが、発行元の朝鮮史編修委員会であればそんなことはない。だとすれば、編纂委員である大谷勝眞に、朝鮮史編修会からの直接配布を依頼したという可能性が浮かび上がってくる。「御依頼之朝鮮史」の前に「先般は失礼しましたが」という意味の一句が付くのは、それを断ったか、あるいはそれは無理ではないかと言ったと考えれば、辻褄が合う。そして実際に交渉したところ、直接配布がかなったので本葉書を送ってそれを知らせたという解釈ができるであろう[30]。

この推測を補うのが、本葉書の差出局が光化門郵便局だった点である。光化門郵便局は当時、京城の中心地である鍾路1丁目にあったが[31]、ここは大谷勝眞の住居がある倭城台、職場である京城帝国大学のいずれからも非常に距離がある。一方、朝鮮史編修会は朝鮮総督府内に置かれており、光化門郵便局は最寄り局に当たる[32]。消印の時間は午後4時～8時であるから、朝鮮史編修会からの帰路に本葉書を光化門郵便局の窓口もしくは管内ポストに投函したと考えるのが、最も妥当である。とすれば、大谷は朝鮮史編修会に行って暁烏への『朝鮮史』配布について交渉し、それがうまくいったので、ただちに本葉書を書き、帰路に投函したという見方ができるであろう。

以上の推定が正しければ、本葉書は、『朝鮮史』がどのように配布されて広められたかが知られる貴重な一事例であり、また暁烏敏の図書蒐集がどのように行われたかを考える上での貴重な情報を提供するものでもあるといえよう[33]。

本文には、もう一つ用件が付されている。4行目の「尚大東輿地図一部呈上」である。ここでいう『大東輿地図』が、本葉書が挟み込まれていた暁烏文庫所蔵の『大東輿地図　奎章閣叢書第2』（本編・索引）であることは間違いなく、だからこそ本葉書が2冊組の1冊である『大東輿地図索引』に挟み込まれていたと考えられる。

この『大東輿地図』の刊行は、奥付により昭和11年3月18日であり、京城帝国大学法文学部の発行だから、すぐにも送付できそうなものであるが、暁烏が実際に本書を受け取ったのは、その受領日付印が「11.12.30」となっているので、昭和11（1936）年12月30日である。この間の事情は不明だが、少なくとも本書は公費を以て刊行したので、暁烏への配布に当たって何らかの手続きが

必要で、それに一定の時間がかかったことは間違いなかろう[34]。

なお、「尚」とあるので、本葉書の本来の主旨はあくまで『朝鮮史』送付のことであり、『大東輿地図』の献呈はそのついでに大谷が思い立ったものと見ることができる。

おわりに

以上、暁烏文庫所蔵の『大東輿地図』に挟み込まれていた暁烏敏宛の葉書がどのようなものなのかを明らかにするところから出発し、東洋史学や書誌学、あるいは暁烏敏研究に関わるいくつかの事実を明らかにしてきた。最後に、それらを簡単にまとめる。

本葉書は、昭和11（1936）年11月29日に、京城帝国大学法文学部教授であり真宗大谷派の僧侶でもあった大谷勝眞より、暁烏敏に対して送られたものである。その葉書の主旨は、暁烏が同年10月に京城を訪れた際に大谷に依頼した『朝鮮史』既刊の朝鮮史編修会からの配布について、それが実現したことを知らせる点にあったと考えられる。また、これに付随して京城帝大法文学部が編集・発行した奎章閣叢書[35]の近刊『大東輿地図』を進呈する旨を知らせようともしたのである。本葉書が出された経緯を調べていくと、従来ほとんど知られていなかった東洋史学者大谷勝眞についての情報や、朝鮮総督府による植民地支配と歴史学の関係を考える上でかねてより注目されてきた朝鮮史編修会編『朝鮮史』の配布に関する情報、さらには暁烏敏の交友関係や蒐書過程についての情報などを得ることができる。その意味で、本葉書は今後のこれらの研究に資する貴重な資料と評することができよう。

追記（村上）

本葉書の釈文作成にあたっては村上の同級生であった金沢大学人文学類日本史学研究室卒業生の山下司氏に御協力頂いた。これは同じく同窓で日本史学研究室卒業生である神部滉陽氏からの御紹介により実現したものである。釈文の完成と、それによる本葉書の詳細な内容解明はお二人の協力なくしてはあり得なかった。ここに名前を記して謝辞を申し上げるものである。なお、釈文の誤字等があった場合は、それを転記した村上に責任があることをここに明記する。

追記（古畑）

本小稿のもともとの調査は、村上慧馬君が金沢大学附属図書館に『大東輿地図』を返却するに当たり、挟み込まれていた本葉書の価値を示して紛失が無いようにしようとしたことに始まる。古畑はそれについてアドバイスをしたが、原稿を読むなかで、その原稿には学術的な価値があると判断し、村上君に『資料館紀要』への投稿を勧めた。ただ、村上君と古畑の間では、問題関心に違いがあり、また原稿のままでは漠然としていて推測に拠る部分もあったので、学術性を高める見地から古畑の方で全面改稿をおこなった。その過程で、釈文の一部を修正し（第4行5字目を「尚」とした）、大谷勝眞の経歴等を増補し、第3節の結論を変更した。それらについては古畑に責任があることを、ここに明記する次第である。

註

1　本編の資料IDは8200-08156-7、請求番号はA292.1038/K42/1。索引の資料IDは8200-08157-5、請求番号はA292.1038/K42/2である。

2　昭和8年以前は「郵便はかき」という表記であった。

3　「暁烏敏年表」(『暁烏敏全集』別巻、涼風学舎、1977年、1-220頁）145頁。

4　栗原敦編注「宮沢賢治周辺資料：金沢大学暁烏文庫蔵 暁烏敏宛 宮沢政次郎書簡集」(『金沢大学文学部論集 文学科篇』創刊号、1981年、49-107頁)。

5　「郵便區劃」(『石川縣石川郡誌』第三章政治、石川県石川郡自治協会、1927年）105頁。

6　「法文学部職員」(『京城帝国大学一覧 昭和一一年』京城帝国大学、1936年）190頁。

7　柏原祐泉監修『真宗人名辞典』(法蔵館、1999年）には、項目として「大谷勝眞」は挙がっていて、大谷光勝の孫であることや京城帝大教授であったことは書かれているが、生没年は不詳となっている。

8　西脇常記「大谷勝眞のベルリン訪問―戦前におけるある日本人學者の功績―」(『中國古典社會における佛教の諸相』知泉書館、2009年、247-262頁)。

9　『玉蘭女史遺詠』(大谷勝眞、1941年)。本書は彼女の歌集で、その50回忌を記念して息子大谷勝眞が編集・発行したものである。

10　川邉雄大「近代における漢学と僧侶―東京帝国大学文科大学に学んだ真宗僧を中心に―」(二松学舎大学・台湾精華大学共催国際シンポジウム「19世紀東アジアの思想文化と漢学」(2014年2月24日)発表資料。二松学舎大学日本漢学研究センターHPに掲載)。

11　長佐古美奈子「学習院における歴史教育の始まりと標本室」(『学習院大学史料館紀要』第19号、2013年、1-16頁）注49。

12　「叙任及辞令」(『官報』第2363号大正九（1920）年六月一八日付）第四面中段。

13　「叙任及辞令」(『官報』第4080号大正一五（1926）年四月二日付）第一〇面二段。

14　西脇（2009）247-248頁。

15　「敍任及辭令」(『朝鮮総督府官報』第11号昭和二（1927）年一月一三日付）には、「昭和二年一月十一日／京城帝國大學教授大谷勝眞／史學研究ノ爲滿一年六箇月間英吉利國、佛蘭西國、獨逸國及亞米利加合衆國ヘ在留ヲ命ス」(第六面下段）とある。

16　「敍任及辭令」(『朝鮮総督府官報』第74号昭和二（1927）年四月一日付）には、「昭和二年三月十日／京城帝國大學教授在外研究員大谷勝眞／在外研究員規程第十二條第二項但書ニ依リ俸給年額二千二百七十五圓ヲ給ス」(第三面上段）とある。

17　「叙任及辞令」(『官報』1459号昭和六（1931）年十一月九日付）第六面上段。『朝鮮史編修会事業概要』(朝鮮総督府朝鮮史編修会、1938年）第5章職員の委員一覧表では、就職年月日を昭和6年11月7日と記すが、解職年月日にはその日付を記しておらず、本書刊行当時(昭和13年6月13日）も委員であったことがわかる。

18　「故京城帝国大学教授大谷勝真位階追陞ノ件」(『叙位裁可書 昭和十六年』叙位巻八八、昭和十六年一二月七日付、70-75頁)。

19　西脇（2009）257頁。なお、このノートをマイクロフィルムにしたものが京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター図書室にも所蔵されている。

　また、大谷勝眞が所蔵していた東洋学関係洋書数千点は、1942年に満洲国国立中央図書館籌備処の所蔵となり、「西域史関係の欧文文献の蒐集としては他に比類を見ない」と評さ

れていたが、敗戦後の混乱の中で略奪に会い、散逸したという。大場利康「満洲帝国国立中央図書館籌備処の研究」(『参考書誌研究』62、2005年、1-186頁）103・127・138頁。

20　五島寧「京城の市街地整備における日本人居留地の影響について」(『都市計画論文集』48-3、2013年、513-518頁)。

21　「大谷勝眞」(『第十三版 人事興信録 上』人事興信所、1941年、オの部118頁三段目)。

22　『玉蘭女史遺詠』のあとがき3頁。

23　八尾別院の寺号は本信寺で、真宗大谷派の寺院である。慶長11（1606）年、久宝寺村の森本七郎兵衛貞治らが本願寺の東西分立に当たって東本願寺側に属し、久宝寺村を出て八尾庄に移住して建立したという。八尾市文化財情報システム「大信寺」http://bunka.city.yao.osaka.jp/detail/index?cultural_id=91（最終閲覧日2021年12月19日）参照。

24　発行元は香草舎。1925年から1942年まで発行され、前身の『薬王樹』（香草舎、1922-24年）から通算で21巻まで数えた。

25　涼風学舎、1975-78年。全集27巻と別巻の全28巻。

26　『暁烏敏全集』24巻（1977年）117-183頁。原載は『願慧』昭和11年11・12月号。

27　『暁烏敏全集』24巻、359-362頁。原載は『願慧』昭和15年7月号。

28　『暁烏敏全集』24巻、192-194頁。原載は『願慧』昭和11年12月号。

29　『朝鮮史編修会事業概要』第4章第3節第2項「印刷及び配布」、120頁。

30　『朝鮮史』の奥付には、発行元を「朝鮮印刷株式会社」として価格を印刷したものと、それらがないものがある。それらがないものが、朝鮮史編修会が印刷時に配布用として印刷所に作成させたものと考えられる。暁烏文庫の昭和11年11月11日の受領日付印のある『朝鮮史』を調べてみると、大半は印刷所と価格のある本であるが、第5編第5巻だけはそうではなく、配布用のものであった。朝鮮史編修会としては、最初の配布以降も事情に応して寄贈・配布を行ってきたと思われるが、最初に印刷した分がなくなれば、販売分から補充することが当然考えられる。したがって、まとまって送られてきた書籍の中に1冊でも配布用の本が入っていたということは、朝鮮史編修会からの直接配布と考えて間違いなかろう。

31　「朝鮮総督府告示第三百七十一号」(『官報』第5号昭和二(1927)年一月六日付、第二面二段)には「大正十五年十二月六日ヨリ光化門郵便局ヲ京畿道京城府鍾路一丁目ニ移転ス」とある。

32　なお、朝鮮総督府内にも構内郵便局があった（「朝鮮總督府告示第157号　朝鮮總督府構内郵便局設置」『官報』3608号大正十三（1924）年九月一日付、第四面三段)。なぜ構内郵便局に差し出さなかったかは不明である。

33　なお、暁烏文庫所蔵『朝鮮史』には、保存状態にむらがある。一部の書籍には書き込みや付箋が頻繁にみられる一方で、そのほかの書籍には全くといっていいほど手が付けられていない。このむらの状態を実見の上で検討したところ、暁烏は『朝鮮史』第四篇高麗の部分について熱心に読んでいた形跡があった。暁烏が高麗時代の仏教の盛行に関心を抱いていたことと関係すると思われるが、書き込み内容や付箋の位置を詳細に検討すれば、暁烏が特にどの点に関心を抱いていたかが判明するであろう。

34　『大東輿地図索引』の奥付には価格の表示はなく、市販されていたものではない。

35　奎章閣叢書は全部で9巻出版されたが、暁烏文庫に所蔵されているのは『大東輿地図』のみである。

附表1　大谷勝真著述一覧（著書は除く）

題名	掲載誌・掲載論文集	巻号	発表年	掲載頁
唐時代の里程に就て	『東洋時報』	第122号	1908年	41-44頁
歴史地理―罽賓の位置及地名に就て（上）―	『歴史地理』	第13巻5号	1909年	13-17頁
歴史地理―罽賓の位置及地名に就て（下）―	『歴史地理』	第13巻6号	1909年	1-22頁
エム・アッシュ・マスペロ述「明帝霊夢遣使伝説考」	『東洋学報』	第1巻2号	1911年	100-109頁
福德舍に就きて	『救済』	第2巻4号	1912年	6-13頁
佛教傳來の歴史	『教育画報』	第2巻	1915年	88-92頁
聖德太子	『教育画報』	第2巻	1915年	183-187頁
シルヴァン・レヴヰ氏「孔雀経中薬叉の地理的列表に就きて」	『東洋学報』	第6巻2号	1916年	277-287頁
ヴィンセント・スミス氏「アクバル帝生誕年代考」	『東洋学報』	第7巻2号	1917年	304-311頁
釋迦	『教育画報』	第5巻	1917年	48-51頁
金人考	『山家学報』	第10号	1918年	1-14頁
ラウフェル氏「チベット文字の起原に就いて」	『東洋学報』	第8巻3号	1918年	458-467頁
マンネルハイム氏『サレユグル及びセラユグル民族の調査』	『東洋学報』	第10巻2号	1920年	288-296頁
支那に於ける仏寺造立の起源に就いて	『東洋学報』	第11巻1号	1921年	69-101頁
安世高の訳経につきて	『東洋学報』	第13巻4号	1924年	546-583頁
安西四鎮の建置と其の異同に就いて	『白鳥博士還暦記念東洋史論叢』		1925年	271-292頁
唐僖宗車駕還京師大赦文に就て	『青丘学叢』	第2号	1930年	1-20頁
發刊のことば	『朝鮮之図書館』	第1号	1931年	1-2頁
鄯善國都考	『市村博士古稀記念東洋史論叢』		1933年	251-273頁
敦煌遺文所見錄（一）（唐代國忌諸令式職官表に就いて）	『青丘学叢』	第13号	1933年	171-176頁
圖書館週間に當りて	『朝鮮之図書館』	第3巻4号	1933年	1-2頁
慧超往五天竺國傳中の一二に就て	『小田先生頌寿記念朝鮮論集』		1934年	143-160頁
敦煌出土散頒刑部格殘卷に就いて（敦煌遺文所見錄二）	『青丘学叢』	第17号	1934年	152-178頁
高昌麹氏王統考	『京城帝国大学文学会論纂』	第5輯	1936年	1-43頁
高昌國に於ける儒學	『服部先生古稀祝賀記念論文集』		1936年	213-226頁
三階某禪師行状始末に就いて	『京城帝国大学文学会論纂』	第7輯	1938年	247-302頁
吐谷渾の名稱に就いて	『山下先生還暦記念東洋史論文集』		1938年	49-80頁
勿體ない（第二十一回）名士講演	『文献報国』	第4巻10号	1938年	2-6頁
曹國考	『池内博士還暦記念東洋史論叢』		1940年	239-276頁
西域文化史概論	『大陸文化研究』		1940年	207-240頁
東洋史上より見たる印度史	『大陸文化研究 続』		1943年	89-112頁

本表は、CiNii ArticleやNDLデジタルコレクションを参考にして、村上が作成した。

附表2　金沢大学暁烏文庫所蔵『朝鮮史』各巻に見える暁烏受領日付印の日付一覧

巻号	内容	発行年月日	受領日	備考
巻首総目録		昭和13年10月31日	14.1.23	天金無
第一編第一巻	朝鮮史料	昭和7年3月31日	11.11.11	天金有
第一編第二巻	日本史料	昭和7年3月31日	11.11.11	天金有
第一編第三巻	支那史料	昭和8年3月31日	11.11.11	天金有
第二編	新羅文武王九年－高麗太祖一八年	昭和7年3月31日	11.11.11	天金有
第三編第一巻	高麗太祖一九年－宣宗元年	昭和7年12月28日	11.11.11	天金有
第三編第二巻	高麗宣宗二年－毅宗元年	昭和7年12月28日	11.11.11	天金有
第三編第三巻	高麗毅宗二年－高宗一〇年	昭和8年3月31日	11.11.11	天金有
第三編第四巻	高麗高宗一一年－忠烈王五年	昭和8年9月29日	11.11.11	天金有
第三編第五巻	高麗忠烈王六年－忠恵王元年	昭和9年7月31日	11.11.11	天金有
第三編第六巻	高麗忠恵王二年－廃王元年	昭和10年3月31日	11.11.11	天金有
第三編第七巻	高麗廃王二年－恭讓王四年	昭和10年3月31日	11.11.11	天金有
第四編第一巻	朝鮮太祖元年－太宗一〇年	昭和7年12月28日	11.11.11	天金有
第四編第二巻	朝鮮太宗一一年－世宗五年	昭和8年10月31日	11.11.11	天金有
第四編第三巻	朝鮮世宗六年－世宗二四年	昭和10年1月30日	11.11.11	天金有
第四編第四巻	朝鮮世宗二五年－世祖一二年	昭和11年3月31日	11.11.11	天金有
第四編第五巻	朝鮮世祖一三年－燕山君三年	昭和12年3月31日	13.2.6	天金有
第四編第六巻	朝鮮燕山君四年－中宗一〇年	昭和10年3月31日	11.11.11	天金有
第四編第七巻	朝鮮中宗一一年－中宗三五年	昭和11年3月31日	11.11.11	天金有
第四編第八巻	朝鮮中宗三六年－宣祖四年	昭和12年3月31日	12.9.6	天金有
第四編第九巻	朝鮮宣祖五年－宣祖二五年	昭和12年2月28日	12.6.27	天金有
第四編第一〇巻	朝鮮宣祖二六年－宣祖四一年	昭和12年3月31日	13.5.2	天金無
第五編第一巻	朝鮮光海君即位年－仁祖三年	昭和8年3月31日	11.11.11	天金有
第五編第二巻	朝鮮仁祖四年－仁祖一五年	昭和8年8月29日	11.11.11	天金有
第五編第三巻	朝鮮仁祖一六年－孝宗八年	昭和9年1月31日	11.11.11	天金有
第五編第四巻	朝鮮孝宗九年－顕宗一四年	昭和9年7月31日	11.11.11	天金有
第五編第五巻	朝鮮顕宗一五年－粛宗一五年	昭和10年3月31日	11.11.11	天金有
第五編第六巻	朝鮮粛宗一六年－粛宗三六年	昭和11年1月31日	11.11.11	天金有
第五編第七巻	朝鮮粛宗三七年－英祖二年	昭和11年3月31日	11.11.11	天金有
第五編第八巻	朝鮮英祖三年－英祖二五年	昭和11年12月29日	12.2.7	天金有
第五編第九巻	朝鮮英祖二六年－英祖五一年	昭和12年3月31日	12.9.6	天金有
第五編第一〇巻	朝鮮英祖五二年－正祖二四年	昭和12年3月31日	12.6.27	天金有
第六編第一巻	朝鮮純祖即位年－純祖二〇年	昭和9年11月18日	11.11.11	天金有
第六編第二巻	朝鮮純祖二一年－憲宗六年	昭和10年11月29日	11.11.11	天金有
第六編第三巻	朝鮮憲宗七年－哲宗一四年	昭和11年10月10日	12.2.7	天金有
第六編第四巻	朝鮮李太王即位年－李太王三一年	昭和13年3月25日	13.5.2	天金無
総索引		昭和15年3月31日	15.7.12	天金無

※1　太枠で囲んだ部分は、京城から11月にまとめて発送されたと思われるもの。
※2　天金塗装は、昭和13（1938）年1月4日付朝鮮産金令によって制限を受けたため、それ以降に発行された書籍に関しては塗装されていない。